

発行日 平成24年3月31日

発行者

富山・ミラノデザイン交流倶楽部

高岡市オフィスパーク 5

社団法人富山県デザイン協会内

TEL.0766-63-7140



建築家Paolo Deganello 制作の  
「km 0」テーブルの天板

執筆 池田美雪 \* ミラノ在住

## エコロジー・環境問題とは？

ここ数年、工業デザインを中心とするデザインの牽引力は、新技術とエコロジーへの貢献の2つに集約されていると言っても過言ではない。

デザインと新技術が、生活の質を向上させる役割を担っているのなら、現代社会の大きな課題の1つであるエコロジーと環境問題を避けて通る事はできない。

事実、ミラノ・サローネで発表される新製品へは、年を重ねるごとに、使用目的、製造方法、素材選択、製品の廃棄の流れまでを1つのサイクルとして捉えた、環境により負担の少ない商品提案が望まれている。

例えば、昨年Salone Satellite Awardの一位受賞作品は、木材の薄板を布地のように巧みに加工した収納家具“Accordion Cabinet”、2年前は、圧電気最新技術を応用した省エネシャワーシステム“Piezo Shower”が受賞するなど、いずれもエコロジーを意識した作品であり、若手デザイナーたちの曇りのない視点によって今後のデザインの方向性が示された。

イタリア人のエコロジーと環境問題に対する意識を考える時、数年前に発生したナポリ市のゴミ処理問題が思い出されるが、金持ち優遇政策や政治家優遇策を長年押し進めてきた前政権のツケがこういった事件であらわになったと言えよう。そうした状況の中で、環境改善やエコロジーの推進を国の政策に期待したとしても実現するまでにずいぶん時間のかかる事と予想される。イタリアでは右派と左派のどちらを支持するのか意見をはっきりと持つ市民が多く、右派は企業家など富裕層に支えられ、経済の促進に焦点を当てているにもかかわらず、経済と環境問題の関連性にはあまり関心を示さない。一方、社会の基盤をなす一般市民の間では、自分たちの力で少しでも生活環境を改善していこう、と草の根運動を推進する左派の団体が年々活動を活発化しており、それらが近年広く認められてきている。

デザインの分野でもこれらの流れと並行して、左派的な考えが新しい世代のイタリアン・デザインを生んだ。その発祥となるのは、生分解性の素材を使ったカトラリー「MOSCARDINO」でコンパッソドーロ賞を受賞したGiulio Iacchettiが発起人となり、12人のデザイナーたちが2005年にCoop(生活協同組合)へ持ち込んだプロジェクト「デモクラシー・デザイン」である。現在EurekaコレクションとしてスーパーマーケットCoopで販売される日用品のデザインのシリーズなのだが、Giulio Iacchettiはこのデザイン戦略を介して「単に夢を持たせる贅沢品をデザインするという行為を、ある意味、調整し修正することができた」と語る。発案から製品化まで4年の歳月が費やされたが、その間、製造過程での無駄をとことん省き、同時にデザインに忠実に作り上げる製造システムが模索されたと言う。日常必需品だが、使って楽しく、また製造過程から無駄がないという斬新なコンセプトが市民権を得たプロジェクトである。

## ミラノ・サローネとエコロジー

毎年、デザインとアートとの曖昧な境界線を味わえるイベントが楽しいミラノ・サローネだが、今年も興味深い内容が数多く企画されている。

中でも、トルトーナ地区にあるSuperStudioPiùの展示会場で開催予定の「MUSEI DI CARTA - 20 designers for 20 italian museums (紙の美術館 - イタリアの20の美術館の為に20人のデザイナー)」は、エコロジーと

アートの接点を求めた今を反映するコンセプトが打ち出されている。イタリア国内に点在する20の美術館・博物館で販売される事を前提に、20人(グループ)のデザイナーがそれぞれ「紙」を素材にして美術館・博物館に関連した商品を提案制作する。

制作条件として、「作品は、デザイナー各自に割り当てられた美術館・博物館と関連性を持つこと」などと並び、「量産化される場合にはエネルギー消費量が低く抑えられる事」「作品の大きさはかさばらず観光客や来館者が簡単に持ち帰られるように軽いものでなければならない」などが課せられている。

このエキシビジョンに参加するデザイン・ユニットGumdesignへ、プロジェクトのコンセプトやエコロジー問題についてインタビューを行なった。

池田 - 4月に開催されるフォーリサローネにおいて「MUSEI DI CARTA-20」に出展されますが、Gumdesignはどのような作品を発表されるのですか？そのコンセプトを教えてください。また、制作条件にも規定されているエコロジーへの課題に対し、どのように考え制作されたのですか？

Gumdesign - 我々は、ローマ市のヴィットラ・ジュリア国立エトルリア\*博物館を対象に「Raccontastorie (歴史を語る)」を制作しました。

\*紀元前8世紀から紀元前1世紀頃ごろにイタリア半島中部にあった都市国家群 (ウィキペディアより)

ローマ市のヴィットラ・ジュリア・エトルリア博物館に展示されている独特で無二の歴史、その記憶と感動を思い出としてスケッチや言葉で綴ることができる三次元の小物を発案し、クラテール(酒混器)とアンフォラ(壺)の形をしたノートを制作しました。

素晴らしく感動的な旅の中で、ノートのページを埋めていくことにより、二次元の壺の画像が三次元性を得る事ができるというコンセプトです。

「Raccontastorie」は白紙、グリッド線、横線のページと、エトルリアの歴史を語るグラフィックを用いた表紙により構成されています。

エコロジー支援の課題については、制作に簡単で時間もかからない型抜き用の紙を用いる事で条件を満たしました。大きな投資や高額な作業も必要なく、要求されるのはただ単純な印刷技術と製紙技術だけです。

池田 - この3月で昨年の東日本大震災から1年が経ちますが、この規模の震災が発生した場合に、デザイナーの立場から直接的あるいは間接的に復興後、なにか有用な貢献をなす事ができますか？

Gumdesign - デザイナーや建築家たちは、日本を支援する為に大なり小なりの介入に努める事ができます。直接的で即時的な方法は、我々一人一人が民主的かつ大らかな形式にのっかって、参加し協力し合うことです。

日本への援助を目的に、イタリアでは数多くのアーティストとデザイナーからの支援が企画されましたが、L'isola della Speranza(非営利団体「希望の島」)が企画したプロジェクトでは、それぞれのデザイナーが考案した一連の募金ボックスへ義援金を募り、宮城県と福島県



フォーリサローネ期間中に「MUSEI DI CARTA」へ出展される、デザインユニットGumdesign制作によるノート「Raccontastorie(歴史を語る)」。



Gumdesignの2人。トスカーナ州ヴィアレージョ市にあるスタジオを拠点に、精力的にデザイン活動を行う。

へ送られました。Gumdesignも「100 lucky stars for Japan - 1 lucky star for you」と題した募金ボックスを提案したのですが、折り紙で作られた大きな箱の中に100個の星を入れ、中央に小さな募金の箱を設置したデザインです。募金と引き換えに星を持ち帰るという趣向です。このプロジェクトは、現在も各地を巡回していますが大成功を収めています。我々をこのプロジェクトへ招待して下さい、ささやかながら我々のデザインによって日本を支援させて頂く機会を与えてくれた、デザイナー菰田和世さんへあらためて感謝させていただきます。

## デザイナーへのインタビュー

エコロジーと経済危機に関するインタビューを、前述のインタビューに答えてくれたGumdesignを始め4人のデザイナーに投げかけてみた。彼らのデザイン・アプローチにより視点が異なっているのが興味深い。

### 質問

「物質的および経済的な資源は限られている」

「世界はエコロジーの大きな危機にさらされている」

この2つの現実を前にして、あなた方の仕事にどのような影響が及ぼされているのかを教えてください。

Gumdesign - 危機についてですが、世界経済が「困難な時」にあることは言うまでもありません。ですが、この現象は大きな資源であると信じています。というのは、クリエイターや企業など改革を模索するものにとって、この「危機」は「刺激」として捉える事ができるからです。「危機の時」というのは、我々の成長を助けるのに必要な時間なのです。デザイナーやクリエイターは、最小限の資源で最大の効果を上げることを目的に、エコロジー支援として私たちの地球汚染をできるだけ削減することが可能な素材を選択すべきです。我々の小さな現実においては、汚染の少ないエコロジー支援の素材を積極的に扱う工夫をしています。例えば照明器具のデザインでは省エネランプを使うとか、あくまでも使い捨てのものをデザインしないように心がける、地球への汚染を引き起こしてはならないのです。これに加えて、さらにできるだけ少ない素材の消費ですむように、カットした紙や鉄板などの二次元を操作し、三次元の立体に起こすといったデザイン工程を習慣にして取り組んでいます。これらは、すべて私たちなりの資源節約です。

Gumdesignと並び、イタリア・デザイン界のホープとして脚光を浴びつつも、地元企業などと手を組んで地道なデザイン活動を続けるPaolo Ulianに尋ねてみた。

Paolo Ulian - エコロジーと環境は私自身のコミュニケーションにおいて基本的な問題です。おそらく、デザインを行なう者全てにとって基本だと信じていますが。

私個人にとっては、デザインを始めた20年ほど前から常に気にかかっている問題でもあります。

これまで多くの作品を制作してきましたが、今にしてやっと製作過程における廃棄物をあらかじめ回避することができるようになりました。

素材を再利用したり廃棄物に再度手を加えたりしながら、人々の行動へ影響を及ぼすことができるものを発信していくことに意識を注いでいます。

また、これら倫理的考察とアートの発信に関わる全てに関するものが、今、私が興味を持っている課題です。



サローネ・サテリテでの受賞以来、常に意義深い作品を発表し続けるデザイナーPaolo Ulian。



「MUSEI DI CARTA」へ出展される、Paolo Ulianの作品。ポスト・イットで作られたダビデ像のベースメント。

ベネトン社のセンセーショナルな広告を作り出してきたOliviero Toscaniをキュレーターに迎えて個展を開催するなど、常に社会に一石を投じるコミュニケーション・デザイナーJoevellutoは企業が抱えるエコロジー問題を考察する。

Joevelluto - この2つの現実は、エコロジー問題に関連したもう1つの側面を持っています。この問題は各々の自覚の問題というよりもむしろ周知の事実であり、エコロジー問題は、企業の新しいタイプのコミュニケーションの開発という課題を抱えているため、マーケティング技法とも言い換えることができます。

この視点から、エコロジー支援やこの類いの意味を伝達していくプロジェクトの開発において、ここ数年私の仕事は変化してきました。しかし、本当に各々が日常の中でこの問題を実感する時が来るまでは、真の意味で私の仕事は変わったとは言えないでしょう。

最後に、ミュージシャンとデザイナーの2つの肩書きをもつ異色のデザイナー、Lorenzo Palmeriは質問に対し簡素に答えてくれた。

Lorenzo Palmeri - この問題は私の仕事に様々な点から影響を与えています。一つは言うまでもなく社会に対する責任感であり、もう一つは自分自身の自覚に対してです。

そして、簡単に言い換えるならば、素材との関係、また、クライアントである企業との関係が変化してきているということであり、新しい問題提議がなされているのは明白です。

## km 0(キロメトロ・ゼロ)

命の基本である食に関する問題は、エコロジーや環境問題に並んで現代の大きな課題だが、ここスローフード発祥の地イタリアでは、「デザイン」と「食」はどちらも生活を潤す要素として切っても切り離せない関係である。ここ数年、エコロジーへの気運から、スローフードの発展形ともいえる新しいコンセプト「km0(キロメトロ・ゼロ)」を軸に、食の消費に対する認識が大きく変化しているが、そのコンセプトはデザイン界でも採用されている。

km 0(キロメトロ・ゼロ)とは、ある土地で栽培された食物を、輸送距離ゼロの場所、つまり食物の育った土地で消費されることを指針にした考え方で、日本で言われる「地産地消」と似た考え方である。つまり、輸送による食物の鮮度の劣化や、輸送にかかるあらゆるコストをできる限り削減しようという動きである。

60年代に建築家Andrea BranziやMassimo Morozziたちとデザイン・グループArchizoomを結成し、常に時代の流れに敏感に反応しながら革新的な創造活動を行ってきた建築家Paolo Deganelloは、「km0」という名のテーブルをデザイン制作した。「現在、私は(食に限らず)資源が生産される場所でその資源を使った商品が製造されるべきだ、という理論を追求している」と言う。製紙用にミラノ市郊外に多く植林されるポプラの幹から切り出される3枚の板を天然樹脂で接着し、6本のハシバミのムク材を天板にビス止めしたテーブルは、純粋なミラノ産の家具としてアート活動を推進するFondazione Morelatoへ永久保存されている。



建築家Paolo Deganello 制作の「km0」テーブル

また、Paolo Deganelloは、2015年に開催予定のミラノ・エキスポがミラノ市民の生活の質の向上を促すチャンスとして「Milano 2015 Expo Diffusa e Sostenibile(ミラノ2015・普及し支持しうるエキスポ)」の名の下、建築家の視点とネットワークを用いて活動を進めている。現在、Cini Boeri、Alessandro Mendini、Ermanno Alessiなど大御所のクリエイターたちが賛同を表明している。

「地球に栄養を、命にエネルギーを」と謳われるエキスポ2015のスローガンだが、開催地に指定されるミラノ郊外の広大な敷地は、イタリア国内で生産高一番の農業地帯の一角であり、いまだ農業家や酪農家が生産を営んでいる。彼らがエキスポへ地売りをし廃業すれば、スローガンとは裏腹にミラノ市民の食文化は格段に衰えてしまう恐れが大きい。

これらの計画を方向転換させるべく、建築家ならではの知恵と力量を使って、エキスポ開催に併せて進められている市の都市計画へ、食を中心に市民の生活向上の助けとなる提案をしている。

具体的には、ミラノの外環状線から農業・酪農地が広がる郊外まで自転車専用道を敷設し、エネルギーを使わないアクセスを実現し、新しく敷かれる道路には多くの植林を行なうなどして緑化を推進。そして、エキスポ開催期間中には、現存する農業家・酪農家が消費者へ仲介なく安価で新鮮な産物を直売できる場を提供することで生産物をアピールする、と同時にエキスポ来場者へアグリ・ツーリズムの形態で宿泊施設を提供できるよう建設資金援助を行なうなどである。イタリアはヨーロッパの中で、食物生産量が一番多い国であり、外国から多数の観光客を迎え入れるエキスポは、Made in Italyを最高の条件で味わってもらえる絶好の機会である。

これら提案されたアイデアの中で微笑ましいのは、発展途上国への援助である。上記の案に加えて、ミラノでレストラン業を営む移民者を対象に、各国のエスニック料理を調理販売できる場所を市内各所に設置し、売上金の一部を各国への募金として収めるという案である。共産圏の崩壊や戦争、飢餓などの要因によりミラノ市には多くの移民者が住んでいるが、彼らをも含んだ市民の生活向上を願う気迫と、間接的だが困難を抱える国への支援を行なうことで、地球規模の環境問題へと意識を促していこうという意図が感じられる。

これらの案が実現すれば、ミラノ市の自然との共存もずいぶん楽しいものになるだろう、と期待で胸が膨らむ。

## 建築家アンドレア・ブランヅィ氏への独占インタビュー

40年以上に渡りイタリア・デザイン界のブレーンであり続け、同時に日本においても様々なプロジェクトに関わり、現在も国際的に活躍する建築家アンドレア・ブランヅィに、「デザインの今」をお話し頂いた。



建築家アンドレア・ブランヅィ、1938年フィレンツェ生まれ。ストウーディオ壁面に飾られた数々のコンパッソドーロ賞の前で。

池田 - あなたにとって、日本のデザインの優れた点はこういった点だとお考えですか？

アンドレア - そうだね、日本のデザインの優れた点、ここで私の言うデザインとは私の知っている歴史を含めた意味だが、ホスピタリティという概念へ大きな価値を与えている点だね。例えば、ヨーロッパや西洋では日本のようなホスピタリティは存在していない。アメリカでもそうだ。強いて言うならコンフォートの伝統があるが、これはまた別のものだ。

それら西欧に反して、日本のデザインには、一つの基準点として、洗練されデリケートかつ儀式的なホスピタリティを提供する才能がある。だから、最新の商品からもこれらの才能豊かで優しく軽やかで、これまで以上にアジア的な要素が感じられる。

これら全てが、私にとって大変重大な文化遺産に見える、というのは個人生活のクオリティーがグローバル化されている時代では、これらのクオリティーは、それほど関心の対象ではないからだ。国際マーケットと呼ばれているにもかかわらず、これらのマーケットは本来の意味を欠いたものなんだから、むしろ人類学的、社会的、土地的な意味において、「伝統」を消滅させる傾向にある。

だから、形式的な本質であり精神的な本質であるこのすばらしい高尚さを、私は常に大変評価してきたし、私は常にこの種の文化に惹かれてきた。

池田 - 今お話し頂いた内容に関して更にお聞かせ下さい。

あなたは、デザイン界で50年以上仕事をされ、自分自身の肌で歴史を生きてこられ、その経験と知識によって感じとる能力を持っていらっしゃる。だから、このような日本デザインの優れた点を見抜くことができるのだと思います。しかし、あなたが考えていらっしゃる日本製品の優れた点は、海外で戦える可能性を秘めているのでしょうか？もし、そうであればどのような方法で可能なのでしょうか？

アンドレア - ははは、まだ50年は経っていないが。そうだね、日本デザインの危機と困難はイタリアン・デザインのそれとよく似ている。というのは、この2つのデザイン両方が、独特の起源と明確な文化戦略を有する文化から発生していて、これらのデザインが国の歴史による成果であり、机上の理論なんかではないからだ。

市場がグローバル化して、製品が中国から南アメリカまで輸送されなければならないような状況下の今、製品のクオリティーは当然ながら危機に向かう傾向にある。だから、これに関しては解決策はない。時間の中で何とかなる事だろう。

しかし、日本に関してだが、君は日本市場は飽和状態だと言うが、私の見解では、ここ10年間は少し変化しているようだが、日本の大都市の個人の生活はずいぶん犠牲になったような印象を常に受けてきた。というのは、戦後に行なった国の努力というと、工業と経済に関連する大企業への大規模の援助だからだ。大阪や東京の大都市では、中心地に銀行や金融機関があり、その周囲に犠牲となった環状があるのが事実だ。これらを考察すれば、個々の生活のクオリティーの改善に関わる国内市場が存在すると言えるだろう。日本経済はこれまで常に重要な経済であり続けたが、社会的視点から見ればもろい経済であるからだ。国の豊かさが、個人個人の豊かさを基盤としていないからだ。言い換えるなら、西欧のように不動産資産、家屋、住宅の所有ではなく、車、テレビ、PCなどの動産の所有を基盤としているということだ。

しかし、住宅を郊外に維持するのではなく、都市の中心へ移転し始めたらどうだろうか。工業化にまつわるすべての現象がそうであるように、又、どの大都市にも起きる現象だが、(都市部には)多くの空の建物が存在するが、そこに住宅を移転させ、大規模な工業的事業にのっとったものではなく、日本の持つすばらしい伝統に沿った、個人の生活のクオリティーを尊重するところの日本の発展哲学に沿って経済を回転させる。

[池田 - 日本文化自体が日本人に教えているようにですか？]

そうだ。日本文化はとても洗練されたクオリティー、美的、文芸的、詩的なクオリティーを持っている。これらが今後、目指すべき国内市場だと私は思う。

この意味において、イタリアも危機に瀕している、というのはイタリアは他のヨーロッパ諸国やアメリカとはデザインの歴史が大変異なるからだ。

これは、中小企業という企業形態やさまざまな要素を基盤にした工業システムが生んだ結果であると。そして、グローバル化の渦中では、企画の方法だけでなく製造方法も含めたイタリアのやり方では、この市場に向けて生産することができない、世界規模の流通に適した商品は生産できない。あるいは、少なくともイタリア製品はコピーし易く、他の国で生産された製品ととてもよく似通っていると言える。よって、アイデンティティが薄れる。この現象はイタリアでも日本でも起きている。

この事実は単なる偶然ではない。イタリアも日本も「モノ」の世界に大きなエネルギーを費やしてきた偉大な文明国だからだ。イタリアは、モニュメントで有名だった時代もあるが、(モニュメントのような)大規模なシステムより「モノ」の文化を生んだ国であって、言葉を換えるならそれは、ある種の「モノ」への強迫観念と言える。家庭で使用する小さい「モノ」に関しては、こういった歴史的な傾向がある。

日本は、崇高なクオリティーに焦点を当てた「モノ」の文明への大きな投資をしてきた唯一の国だと、私は考える。日本の伝統的建築物、陶器、漆、生け花、床の間、絹、これらのクオリティーに対して常に大きな関心を払ってきた。つまり、モニュメントなどに対してではない。皇居に至ってもベルサイユ宮殿ではない、(皇居内には)庭があり、またいくつかのパビリオンがあり、個性がないとは言わないが、モニュメント性はないと言える。しかし、内部には、非常にクオリティーの高い日本のすばらしい伝統文化が存在する。

私は、アメリカや国際的なやり方に適合するのではなく、今こそ、これらのクオリティーが日本社会に広がっていくべきであると考えている。

日本人は、これまですばらしい創造力を披露してきた。私は70年代に初めて日本に行ったが、その当時、日本社会はとても疲れ、均一で、男性はみな管理職のように背広を着て、女性はブルーの会社の制服を着ており、都会ではこの種の社会が大企業の論理に従って統合されていたのが見て取れた。

今日、日本各地を回ると、クリエイティブな社会、クリエイティブで革新的な若者達を見る事ができる。  
[池田 - 固まっていた社会が溶けてきたという事ですか？]

ああ、ものすごく溶けているね。私は、超工業社会からある種アナーキーでクリエイティブな社会へ移行する変化の過程を見てきた。これが、日本人が我々に見せている日本の創造力であり、国際市場へ対応せざるを得ない工業界にとってはたいへん重要なエネルギーとなっている。日々、カタログやコミュニケーション、サービス、商業戦略を新しくしていかなければならないこの市場では、製品のみならず、(企業)哲学自体と(企業)イメージすら創造力抜きでは前進していかないだろう。過去の時代の石油のように、創造力と変革力は(他を動かす)エネルギーへと変わっていった。石油なしでは前進はありえないように。

今日では、それ以上の何かが存在する。すべてのシステムにとって必要なもの、豊かなファンタジー、しっかりとした創造力、飛び抜けた革新力などだ。私は、そこに日本の巨大な遺産が存在すると考えている。

[池田 - 基本的精神力も含めてですか？]

もちろん！ある一つの文化と洗練性、だが、若々しい創造力でもある。

池田 - 「物質的にも経済的にも資源は限られている」、「世界は厳しい環境危機にさらされている」。この2つの現実を前にして、イタリアン・デザインの将来はどのように発展していくと予想されますか？

アンドレア - (イタリアン・デザインではなく)日本について見てみよう。

日本が常に私を驚かせてきたことは、地震、火災、津波といった大きな災害を人類史に包括された現象として受け止める点だ。自然現象と見なす西洋の伝統と異なり、日本では歴史的な現象と解釈する、つまり発展の形式を省みるよう、また仕事の戦略を変えるよう押し進める現象として捉えていることだ。

[池田 - これらの現象が歴史に包括されている理由とどうですか？]

ああ、その通りだ。人類史上の現象と見なし、自然現象ではない。

例えば、日本で最初の耐震システムに関する法律だ。1923年の関東大震災後、単に街を再建するに留まるのではなく生きる方法をも変化した。その後、そこからすべての耐震システム、つまりその後の消化吸収のムーブメントが生まれたところの耐震システムに関する法律が布かれた。

1995年の阪神・淡路大震災発生瞬間まで、神戸は君も知っているように、トレンドイでとても前衛的で、たいへん奇抜な街だったが、大震災発生によってこの街の脆さと不適正な面が明らかにされた。その後、新世代の建築家たちは、日本に導入されたアメリカ流の近代化のための模範は凝固した近代化であり、とてもヘビーで、故にたいへん脆いということに気づき始め、これらを再考しなければならなかった。

私は、伊東豊雄や妹島和世を含む私の日本人の友人たちに、彼らはアフター神戸の世代であり、大震災を非常に良く解釈しながら、たいへん軽く、柔軟性があり、西欧的でなくアジア的で、たいへん洗練された構造物を創り出す、アフター神戸の世代だと言いつけてきた。

そして、彼らは、阪神・淡路大震災を自然の事故ではなく、むしろ開発型におけるミスの結果だと受け止めた。

その時から、大変洗練され、またマテリアルを試行錯誤する新しい建築家たちが浮上してきた。この事実は、まさに大きな進化を表している。

[池田 - つまり、阪神・淡路大震災の20年後にこれらの成果が出てきているという事ですか？]

その通りだ。反面、西欧では地震による被害があれば、再建して終わり、といった具合だ。私の考えでは、市民的、社会的、文化的な発展の模範に関わる問題について、日本のこういった歴史を考慮したなら、自然の大災害は文化的な大災害と捉えるべきだ。この点は、大変重要である。

[池田 - ということは、1年前に起きた東日本大震災は、転換の大きな要因と成りうるとお考えですか？]

まったくその通りだ。自然現象だけでなく、自分自身を真剣に省みることができるだろう。

[池田 - あなたは、今後何か起きると予測されていますか？]

待っていようじゃないか。私は今後何が起きるかは知らないが、日本は大災害に対して常にこのように反応してきた。

[池田 - 歴史的にですか？]

そうだ、江戸時代の大火、大津波、大地震、などは日本文化に関わる現象として解釈されてきた。

[池田 - それに反してイタリアではそうでないと？]

イタリアだけでなく、西欧がそうではない。西欧では、歴史は別のやり方で解釈されている。

[池田 - おそらく、日本に住む日本人たちは、このことに気が付いていないのではないのでしょうか？]

そうだね、気が付いていないだろうね。だけど、それはたいして重要な事ではない。私はこれまで常に、友人の磯崎新や伊東豊雄が相対的に感じ取っている、この日本のクオリティーを支持してきた。この事に対して、自覚が有る無いは、問題ではない。これらはすべて自発的な行為であって、自覚があるからといって彼らが大災害の受け止め方を変える訳ではない。いずれにしろ、この事実はバイタリティーの証しであって、日本は昨年発生した大震災から確実に抜け出し、我々に再び素晴らしい文化の教訓を与えてくれるだろう。

ありがとうございました。

## 執筆者 略歴

### 池田美雪 インテリアデザイナー

武蔵野美術大学基礎デザイン学科卒

Istituto Europeo di Design 建築インテリア科卒

1994年よりミラノ在住

主に個人邸の改築、パブリックスペースの設計に携わる

設計外に携わったプロジェクトとして

”do it jubunde”展(無印良品、ニコレッタ・ブランツィとのコラボレーション)を企画ならび実現

”Soundesign”展(Marangoniファッションスクール主催)にて弦楽器”Caravantar”を発表

写真雑誌“ZOOM”日本版のコーディネイト、翻訳 など

“TuPlay”展にてグラス楽器”FASOLA”を発表

「Bicarbonato : mille usi per te e per la tua casa」執筆 (FAG出版社より)

(イタリアの生活に密着した重曹の活用方法を書き綴った本)

現在はクリエイティブ・コンサルティング会社(デジタルゲーム、ウェブサイト、グラフィックデザイン)の共同経営者として活動しながら、デザイン・アートに関するコーディネイト、翻訳および通訳に携わっている